考古資料展示 解説シート Vol.1
発行日 2015年11月1日

柴燈林遺跡出土の縄文土器

—4,500年前のやきものの美—

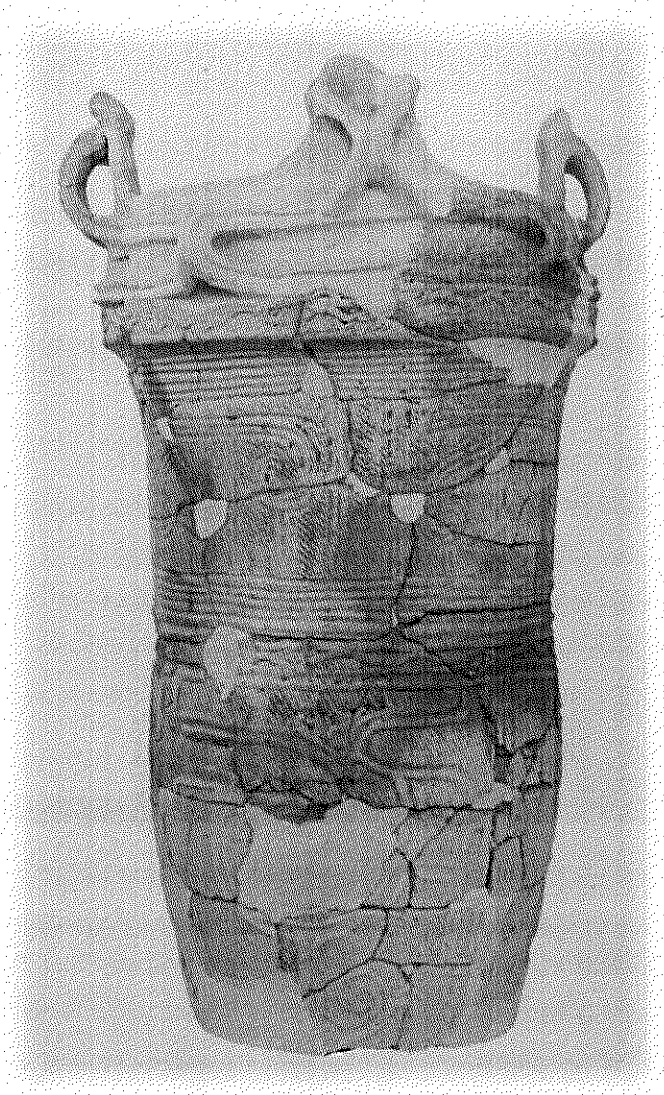
◆ 縄文土器は、年代や地域によって造形や文様が全く異なっており、その多様性が大きな魅力です。約1万年間続いた縄文時代の中でも、中期（約5000～4000年前）には、教科書でお馴染みの「火焔型土器」をはじめとする装飾性豊かでダイナミックな土器が東日本各地で流行しました。山形県を含む東北地方南部で流行した「大木式土器」も立体的な突起などの、実用性からはかけ離れた芸術的な意匠が特徴で、世界の新石器時代の土器と比べても際立った造形であり、観る者に力強い躍動感に溢れた印象を与えます。

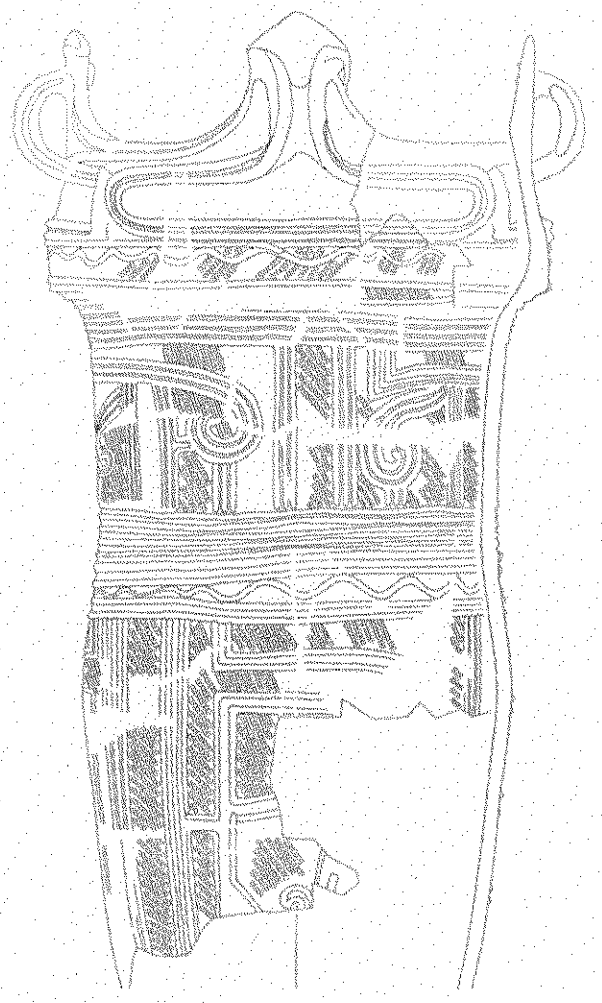
火焔型土器（馬高式）　～新潟から運ばれてきた土器～

柴燈林遺跡の試掘調査（H15）の際、B地区のN30W10試掘坑から出土しました。同地点は、土器の廃棄場と考えられます。特徴的な突起「鶏冠状把手」や「袋状突起」を含む上半部の多くは残存していましたが、胴下半部は「渦巻状文」の他は失われており、類例を綿密に比較して復元しました。表面の文様は通常の縄文土器と異なり、縄目文様でなく、縦に割った竹の先を使った「半裁竹管文」で描かれ、躍動感が感じられます。同じタイプの土器は、短期間に信濃川上・中流域という豪雪地帯で地域限定の流行を示し、後の中期後葉を迎えると、伝統は引き継がれず、雪が融けるように姿を消します。地域も時期も限られた特異な土器と言えます。煮炊きの痕跡もありますが、神の存在を意識した調理器具であった可能性もあります。土器の内面の炭化物の放射性炭素を用いた年代測定の結果は、約4880年前の数値が示されましたが、これは、標準と比べやや古い数値を示し、原因として海産物を調理した可能性が推測されます。

大木8a式土器　～南東北地方で花開いた土器～

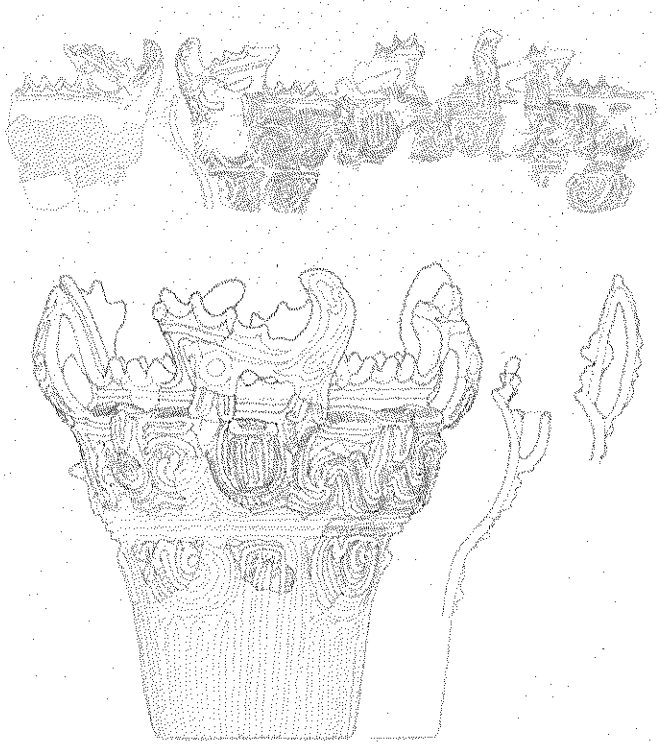
東北地方ではこの時期、秋田～盛岡以北の北東北と、以南（北緯40度線）の南東北で異なる土器様式が存在していました。柴燈林遺跡で主に出土する土器様式は、「大木式」と呼ばれる土器型式であり、これは、宮城県七ヶ浜町の「大木囲貝塚」がその標識遺跡であることに由来します。中期の大木式では「深鉢」と「浅鉢」の組合せが見られます。この深鉢は、底は失われていますが、高さ（現存高）が62cmを測り、口から立ち上がる4つの立体的な橋状の把手が発達しています。口が漏斗形にふくらみ内側に湾曲しますが、この器形は、煮炊きの際に吹きこぼれしにくい形です。側面のくびれたフォルムは、キャリパー（測定器具）形と表現されます。胴の文様は、粘土紐による波状文を境に上下2つの文様帯に分かれ、底近くまで描かれています。上下で施文方法が異なり、縦方向に区画された中に上半部は3本単位の沈線で、下半部は半隆起線や粘土紐による隆線で渦巻文などが施文されています。この土器は火焔型土器と同じ時期に使われ、集落の廃棄場に同時期に捨てられた状態で発見されました。





大木8a式土器(南東北の土器)

Photo by T.Ogawa



馬高式土器(新潟の土器)

発行：遊佐町教育委員会
TEL：0234(72)5892